先駆 1974 年 12 月 20 日　第 3 種郵便認可
2021 年 6 月号
5 月 25 日発行（通巻 997 号）
毎月 1 回 25 日発行

月刊

先駆

2021 6月
997号

◆戦前と重なる政治危機―国益より「人間の安全保障」を！
◆日本の「死刑制度」再考を！―裁判員経験者 OB 会
◆ソーシャルファーム条例始動―新しい共生労働の場

The Front-League for Socialism, Japan
フロント［社会主義同盟］

『先駆』1000号記念

『先駆』編集の思い出

安藤　紀典

活版印刷時代の編集長

『平和と社会主義』が184号（1969年10月28日付）から『先駆』に改題されて、最初の編集長は折戸忍であった。『平和と社会主義』はタブロイド判で旬刊（月3回）だったが、『先駆』はブランケット判（日刊商業紙と同型）でやはり旬刊であった。ブランケット判はタブロイド判より一回り大きい判型だから、やはり迫力が違う。70年安保・沖縄闘争の最中で、紙面構成や見出しの付け方は、当時の言葉で言えば「宣伝・煽動を効かせる」ことに重点が置かれた。

折戸は京都から出て来ていたが、70年の晩秋に地元に戻った。その後は慶応大学のIが編集を引き受けたが、翌年の春ごろ突然失踪してしまい、あとを東京教育大学のHが継いだ。IとHが責任のともなう正式の「編集長」として遇されたかどうかは記憶にない。

1972年、停刊から8カ月ぶりに再刊された257号（10月8日付）は、東京の佐々木成（故人）が京都まで原稿を持っていって折戸に紙面を組んでもらい、大阪の印刷所で印刷した。しばらくその状態が続いたが、73年の春ごろには東京の元の印刷所に戻った。編集は佐々木が担当したが、彼は病気がちで、私がサポートして編集を覚えた。とはいえ、佐々木も私も未熟だったので、時々折戸に来てもらって指導を受けた。この頃は組織再建の過程でまだ持てる力量が十分でなく、月1回刊であったと思う。

その佐々木が74年夏の第10回党大会において中央委員選挙に落選したため（予想外のことであった）、代わりに富田武が「専従」に補充され、『先駆』の編集を担当した。そのことを、彼は『歴史としての東大闘争』（ちくま新書、2019年）の中で次のように書いている。

「私は、親友Sが中央指導部に選ばれなかったため、いわば中継ぎとして専従を勤めることになった」。「機関紙編集は初めての経験で試行錯誤だったが、印刷所で学んだこともある。当時は鉛活版印刷の時代で、棒ゲラ（原稿を一段ずつ植字し棒状に組んだゲラ）を校正し、割り付けに従って配列し、前文と見出し（と写真）を付してできた紙面を再度校正し、降版する（印刷に回す）という手順だった。前任の編集長（折戸）に口うるさく言われたのは、紙面構成も見出しも『ブル新に倣え』であった。商業紙（ブルジョア新聞と呼んでいた）の読みやすさを模範にしたのである」

富田編集長の時代は月2回刊（10日、25日発行）に回復して結構忙しかったので、私も編集を手伝った。78年頃、富田に代わって私が編集長に就いた。私がいつまで続けたのかは記憶があいまいだが、1985年に社会的に大きなイベントがあって、私に幹事の一員になれとの誘いがあったとき、「『先駆』の編集があって無理だ」と断ったのを覚えているから、少なくともそれまでは編集長でいたのだろう。

職人に可愛がられた

『先駆』の印刷所は「東京新聞印刷」で、山手線浜松町駅で下車して通った。立派な名前であったが、日刊の株式新聞を除けば、他は週刊・旬刊・月刊の業界紙がほとんどだった。

共産主義労働者党の紹介で、彼らの機関紙『統一』（由井誓編集長）の印刷所に『先駆』も頼むことにしたのだった。革共同中核派の機関紙『前進』も一緒だった。

『先駆』の編集者は代々、現場の職人たちにかわいがられた。富田は「彼らは誇り高いが、好人物が多く、仕事の後に浜松町の立ち飲み屋に誘ってもらい、日本酒に強くなった思い出もある」と語っている。私も酒が好きな方だが、不思議に彼らと一緒に飲んだ記憶がない。

新聞を組み上げる過程は、植字した本文活字（小箱に1段分ずつ並んでいて、それが幾箱もある）と見出し、それに植字とは別に製版した飾り模様付きの見出しや写真を合わせて、割り付け用紙にしたがって紙面を組んでいく。「おおーい、先駆組むぞ」と声がかかると、傍に立ってこちらの意図通りに組まれていくかを確認し、時には職人の意見を聞いて組み方を部分的に変えたりする。これを「立ち合い」と呼ぶが、それが『前進』とかち合った場合には、職人たちは『先駆』を先に組んでくれた。それには確かな理由があった。

紙面をどう構成するかは、組み方が決まっている「囲み記事」は事前に出来上がっているので、まずそれを所定位置におき、後は割り付けにしたがって、見出し、本文活字を順番に詰めて流していく。問題は活字の量が割り付けの予定をオーバーしてしまったときである。はみ出した分を即座に削ってしまえば、それで作業は終わる。『先駆』ではその判断は現場に任されていたから、作業は簡単だった。ところが『前進』の場合、どうしたらよいか、編集者がいちいち上部の判断を仰がなければならないらしく、電話で長いやりとりをしていた。当然、作業時間が延びる。それなら『先駆』を先に組んだ方が楽だということになる。

沖縄闘争方針を撤回

『先駆』編集上の「失敗」についても記録しておきたい。「失敗」と言ってもいろいろな性質のものがある。校正で見落した「誤植」の類は無数にあるが、それは「人間のやることだから仕方がない」と許してもらうとして、政治的に重大なミスを犯した場合がある。

一つは『先駆』史上最大の誤りともいうべきもので、1972年沖縄返還をめぐる闘いの基本方針について、『先駆』227号（71年2月18日付）に「日本共産主義革命党沖縄地方委員会」の名前で発表した論文がそれである。目前に迫った沖縄返還協定阻止に向けて、同論文は「祖国復帰＝沖縄防衛か、自衛隊沖縄派兵阻止＝『祖国』の打倒か」と日本・沖縄両人民に迫り、「沖縄をプロレタリア革命の砲台とせよ」と主張したのである。重要な論文であったから、第9回大会以後に創刊された機関誌『団結』の第2号（71年4月）にも再録された。

沖縄をプロレタリア革命の砲台とせよ

日本共産主義革命党沖縄地方委員会

「復帰前年」―岐路に立つ沖縄の闘い―全軍労ストの混迷

祖国復帰＝「沖縄防衛」か 自衛隊沖縄派兵阻止＝日の打倒か！

この「沖縄をプロレタリア革命の砲台とせよ」という政治主張が、のちに重大な誤りとされ、自己批判して撤回することになる。『先駆』260号（73年3月3日付）に塚田賢治が「沖縄闘争の新たな発展のために」（実はこのタイトルも「た」の文字が抜けていた）を発表して、この問題の経過を整理しているので、概略を紹介しておく。

――われわれは71年10月に「沖縄新方針」を決定した。①「72年沖縄返還」を日本帝国主義による「沖縄併合」と把握し、②ここにレーニンの民族理論の「併合反対＝自決」のテーゼを当てはめ、「沖縄併合反対、沖縄人民の自決権支持」というスローガンを提起したのである。ここに至る過程で、われわれは「沖縄をプロレタリア革命の砲台とせよ」というスローガンを掲げたことがあった。「沖縄新方針はこうしたわれわれの従来の闘いが、われわれが沖縄人民の立場に観念的に立ち、沖縄人民を利用して、日本人民を恫喝するものでしかないことを反省し、日本人民―沖縄人民の立場の違いを明確にした。そしてこのことを直ちに組織路線と結びつけた」。すなわち、「沖縄人民の自決権（今日では「自己決定権」と表現すべきか）支持」の原則にもとづいて、日本の組織に従属した「沖縄県委員会」を解散し、当時組織していた「反軍国主義共闘」の諸組織から在日沖縄青年を分離した。

――「沖縄新方針」はこんにちでも正しい方針であると確信しているが、日本人民と沖縄人民との立場の相違を、直ちに闘う組織からの沖縄人民の分離の強要に帰結させたのは、もう一つの誤りであった。（以下、略）

ある解雇撤回闘争

『先駆』に掲載した記事が原因で、職場の仲間が解雇された（と編集した私たちが思った）という事件もあった。1972年10月に『先駆』を再刊して以降、改めて現実の労働運動に根付いて活動するという方針を確認したので、そのことを紙面にも反映させるために、「職場から全国の仲間へ」という読者投稿欄を常設することにした。読者の評判もかなりよく、その後はタイトルを「闘いの前線から全国の仲間へ」に代えて継続した。

1974年のことである。新潟県のある工場で、会社と組合の右派幹部が結託して、Y・Sさんに休職処分の攻撃をかけてきた。彼は直ちに新潟地裁に地位保全の仮処分を申請するとともに、地区の青年労働者の仲間が「守る会」を結成して支援した。ここまでの記事が『先駆』に掲載された。

その後休職処分からさらに懲戒解雇へ、そしてその解雇撤回闘争が数年におよんだ。この闘争はすべての裁判で原告が勝利し、本人は職場に復帰をして解決したが、『先駆』への掲載は「失敗」だったのではないかと、長い間私の心の中に「しこり」として残っていた。

そこでこの機会に改めて本人の意見を聞きたいと、新潟の同志を通じて連絡を取ってもらった。以下は解雇撤回闘争の簡単な経過である。

①第一次休職処分。会社はYに対して、「経営理念の精神を否定する言動」がはなはだしく、円満退職を希望して「3カ月間の休職とする」と通告してきた。

資本と結託する幹部
首切り絶対許すな
新潟

(9)

直ちに新潟地裁に仮処分を申請、地裁は仮処分決定を下して勝利した。

②第二次休職処分（休職1カ月延長）。直ちに地裁に仮処分を申請する。

③懲戒解雇。裁判所は復職を盛り込んだ和解案を提示したが、会社はこれを拒否。その和解期日の翌日、会社はYを呼び出し、賞罰委員出席のもとにYに「わび状」の提出と捺印を求めた。Yが拒否すると、すぐに懲戒解雇された。

1975年、懲戒解雇無効仮処分申請を地裁に提訴。この時から私たちと親しい弁護士が東京から出張して任に当たる。76年、仮処分申請に勝訴の判決。続く東京高裁の控訴審も全面勝訴。判決は「懲戒解雇事由に該当しない」と断じた。

仮処分申請と並行して本訴も地裁に提訴した。地裁判決は「会社の不当労働行為」と断定して勝訴。1980年、東京高裁で本訴始まる。高裁が第一回和解調停を提示。第三回調停で和解成立。Yはまもなく会社に復帰し、元の現場に戻った。

私の問い合わせにY・Sさんから次のような返事をもらった。「闘いの初めの段階で『先駆』に投稿したことは覚えているが、これが右派の労組委員長（警察権力とも通じていた）の関心を呼んだことはあったにしても、解雇の理由になったとは考えていない」

それを聞いて今は安心したが、当時の私たちはそうは思わなかった。裁判の途中で被告の弁護士が、「こんなものがある」と言って、記事の載った『先駆』を掲げて見せたということを弁護士から聞いて、私たちは仰天した。協議した結果、もしかするとこれからもこういう事件は発生するかもしれないと判断して、「職場からの報告」を中止す

ることにした。

誤植＝校正恐るべし

小さな誤植の類はいくらもあった。私が編集長時代のことで、今でもよく覚えている例を二つ挙げてみる。一つは米国大統領がレーガンの時代だから、1980年代に入ってからのことであったろう。米ソ対立がまだ厳しい頃であったから、ある記事の中で「レーガン戦略粉砕」という小見出しを立てた。校正が終わっていざ降版という段階になって、職人が「本当にこれで降版してよいか」と念をおすので、「これでお願いします」と返答すると、にやにやしながら小見出しの活字を指さした。見てびっくりした。「レーニン戦略粉砕」となっていたからである。富田の言うとおり、「文明開化の時代から植字工はインテリであった」から、「レーニン」の名前をちゃんと知っていて、私たちをからかったのだった。あわてて訂正した。

もう一つは「単なる誤植」だったとは言え、読者を混乱させてしまった例である。何年頃だったか記憶がはっきりしないが、あるとき一人の同志から、「いんすい」って何ですか、という質問を受けた。彼が所属していた「細胞」（当時はそう呼んでいた）のリーダーは大変な物知りで、「いんすい」について質問すると、たちどころに意味を説明しくれたが、さっぱり分からなかったというのだ。新聞のその箇所を見せてもらうと、「隠衰」と印刷されていて、たしかに「いんすい」と読めるが、私は絶句した。実は「隠蓑（かくれみの）」という漢字のつもりが、誤植で「蓑」（みの）が「衰」（すい）になっていたのだった。私は謝って訂正したが、リーダーはいったいどういう説明をしたのか、あまりに気の毒で聞くのを止めた。

大晦日に『先駆』売る

最後に、編集に関することではないが、『先駆』の活動で珍しくかつ楽しかった経験を記しておこう。1972年の正月を京都で過ごせるように、同志たちが私たち夫婦を招待してくれて出かけたときのことである。大晦日の夜遅く京都に着くと、さっそく祇園（ぎおん）の八坂神社に向かった。大晦日から元旦にかけての八坂神社は「おけら詣（まい）り」で有名で、神社がたく厄除（やくよけ）の「おけら火」から、竹の繊維でできた縄に火をつけ、それを消さないようにくるくる回しながら持ち帰って、家庭の火種として使うという、珍しい風物詩であった。

NHKの紅白歌合戦が終わったあと、その「おけら詣り」に来る人々に、八坂神社の石段で『先駆』を売ろうというのである。京都の同志たちが69年末から始めたことで、この日も皆で大声を出して参拝客に呼び掛けた。一杯機嫌の人がよく買ってくれて、相当の部数が売れた。

同志たちはまだ続けるということだったが、私たちは隣の知恩院の除夜の鐘撞（かねつき）が見たくて、一人に案内を頼んで早くに抜け出した。そのあと指定された店に向かい、皆の来るのを待った。そこは同志の母親が営んでいる小料理屋で、やがて到着した皆と一緒に、日本酒の熱燗で乾杯をした。まことに愉快な元旦であった。